

苦悩の三 K に寄せる

越 山 健 二

三 K が諸悪の根源のようにいわれている。米、国鉄、健保の三 K は何れも国民生活に密着しており、その取り扱いが私共にとって大きな影響がある。財政再建の中でこの三 K の赤字に数多くの非合理的な点や無駄が指摘され、各方面から論議され注目をあびている。

米は国民の主食であり、人間のエネルギーの根元である。それが学校給食等パン食への移行は日本人の食生活に大きな影響を及ぼしたようである。次第に米はなれがなくなり主食の王座を譲るかに見える。この現実から米に関するいろいろの思いや、諸制度は洗い直されなければならないだろう。

国鉄は国民の交通の大動脈の役割を果たしてきた。それが近年飛行機や自動車が補完的な役割を果たし、もはや動脈や原動力ではなくなってきた。膨大な赤字は今後も一層の増加を強めるという。公共性にも自ら限度があり、それを主張しても現実離れの感があり昔の夢にすぎないのではないか。

健康保険もその対象となるのは病気であり、その診断と治療が主体である。このままつづけばその医療費に対する不安が高まっている。高齢化社会といわれ疾病構造も変化し、老人病、成人病など、発病の起点がはっきりしないし慢性に経過し、何れも根治し難い病気が増加している。キウア(Cure)ではなくケア(Care)の時代だともいう。診断、治療も大切である

が、養護し、看護が必要な時代だというわけである。

このように三 K は国民にとって最も重要で何人にも直接関係の深い、主食や運輸、疾病をとりあつかい、何れも長い歴史と伝統をもち、法的にも経済的にも大事にされ守り育てられてきたものである。しかし時代の変化はそれぞれ目標とする焦点から外れさせばけさせてきたのである。

この現実をはっきり認め、新しい対応をせまられているように思う。米にしろ、国鉄にしろ、医療も又旧来のままでは存続し得ない時代の到来を迎えたのである。

医療については抱括医療や地域医療、保健活動の重要性が指摘されている。従来稍もすると保健や福祉対策は国や行政に依存し時には物乞的な傾向も否定出来ない。医療の近代化は地域に根を張り、住民が中心でなければならぬといわれる。健康で生涯を楽しく過ごすためには各人が家庭や近隣、学校や職場で自立、自助の気持ちをもりたてお互いの連帯感を深め、協力の姿勢を培はなければならない。医療に従事する者は専門の組織化に心掛け、人間の肉体、精神を生涯に亘ってみつめると共に、地域住民を生活の場でとらえ常に語り合いの機会を持つ事が今後一層重要なのではないかと思う。